

薬物乱用と大学生

Drug abuse and university students

窪山 泉*, 小野 浩二*, 窪山 暁**, 伊藤 拳*

Izumi KUBOYAMA*, Kouji ONO*, Akira KUBOYAMA** and Susumu ITO*

Abstract

There is considerable concern about drug abuse among university students. The purpose of this study was to clarify whether students were at risk for drug abuse. Subjects were 499 freshmen (361 males and 138 females) who were being trained as emergency response personnel and were under the age of 20. An anonymous self-completed questionnaire was given to freshmen each year from 2006 to 2009. Results indicated that 15% of the subjects had a friend or acquaintance who tried illegal drugs during high school and 3% had been persuaded to use illicit drugs themselves. Continuous monitoring and an effective counseling system are needed to prevent drug abuse among university students.

Key words; drug abuse, students, persuasion

I はじめに

2008年某大学の運動部員が大麻を自室で栽培して逮捕され、続いて、複数の有名大学学生が薬物乱用で逮捕が連続し、さらにある大学構内ですら薬物が売買されて、薬物の大学生への浸淫は社会に大きな衝撃を与えた。

犯罪白書によれば、平成20年度の薬物犯罪に関する検挙者数は、覚せい剤が11,231人と最も多く、ついで、大麻が2,867人となっている。特に大麻は平成13年以後急増しており、平成12年の2.3倍増になっている。またMDMA等の合成麻薬

による検挙者も281人と増加し、注視されている。検挙者数はあくまで一部で、実際は相当数存在すると推量される。

薬物依存に関する研究、報告は国内国外ともに多数あるが、国内の文献を検索すると、意外なことに大学生を対象とした報告は、ごく少なかった^{1, 2)}。また男性のリスクがあることは、検挙者数が男性に圧倒的に多いことなどからよく知られたことである。4年間、医療系学科の大学生に薬物依存のアンケートを行い、男女に分けて比較検討したので、報告する。

* 国士舘大学大学院救急システムコース (Graduate School of Sport Systems, Kokushikan University)

** 新光株式会社 (SHINKO, Inc.)

II 方法

医療系の1学科に2006年度から2009年度まで4年間、薬物依存について自記式調査を行った。同科の定員は155人であり、4年間の履修届けの人数は合わせて620人であった。調査は、無記名で、選択式であった。講義は定員の半数ずつ、前期後期に分けて実施されるので、調査はそれぞれ6月、11月に行った。記入の年齢が18歳から20歳までの男性361人、女性138人、合計499人を調査対象とした。年齢が18、19、20歳と記入されたものを対象とし、未記入および21歳以上は対象から除外した。年齢をみると、男性は18.7±0.6歳、女性は18.6±0.6歳であり、男女間の差はなかった。履修申告総数の80.0%に相当する。

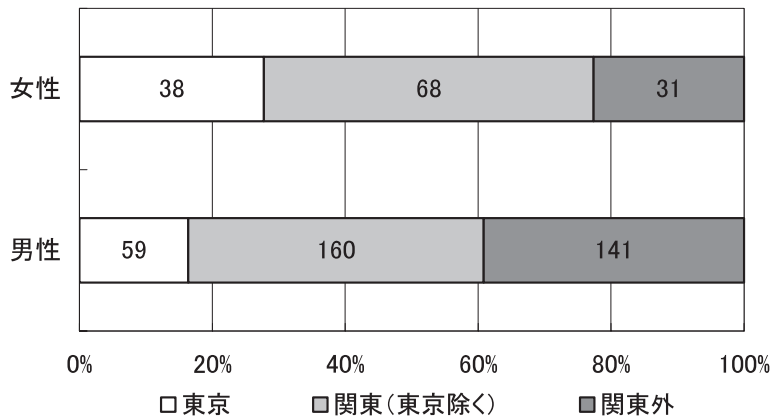
調査項目として以下のことを調べた。属性として、性、年齢、出身高校の所在地、調査年、調査月であり、薬物に関する教育として、「高校で薬物について学んだことがあるか」、「何の授業であったか」、「高校で薬物についてもっと教えるべきか（高校でもっと教えるべき）」、「どのようなことを教えるべきか」であり、本人の考えとして、「薬物乱用は自分の意思がしっかりしていれば、

止めることが簡単と思うかそれとも難しいか」であり、自己の体験として、「友人の間で、薬物の話題が出ることもあるか」、「高校生だったころ周りの高校生が薬物を使用した話を聞いたことがあるか」、「周囲から薬物の使用を誘われたことがあるか」であった。

Kyplotを用いて、 χ^2 検定を行い差について、各項目について、男女差を検討した。また、接触の危険リスクと考えられる「高校生だった頃、周りの高校生が薬物を使用したという話を聞いたことがある」について、SPSS for Window (11.0.1J)を用いて多重ロジスティックモデル解析を行い、オッズ比を算出した。

III 結果

各年度の薬物の受講率は90%であり、年度毎の受講率は男性、女性間に有意な差は無かった(図2)。高校までに受けた研修の機会は、保健体育の授業が最も多く、男性で66%、女性75%で、次いでホームルームで、男性18%、女性17%であった(図3)高校で薬物についてもっと教えるべきかの問いに対して、男性で73%、女性で67



グラフ内の数字は実人数 $p=0.005$

図1 高校の所在地はどこか

%が教えるべきと答えていた(図4)。高校で教えるべきこととして、薬物乱用の現状や回復者の体験談が多かった(図5)。「薬物乱用は自分の意志でしっかりとしていればやめられるか」の問いでは、とても簡単あるいはやや簡単と答えたものは男性で19%、女性で19%であり、かなり難し

いあるいはとても難しいと答えた者は、男性65%、女性65%であった(図6)。「友人の間に薬物の話題が出るか」について、よくあるあるいは時々はると答えた者は男性15%、女性で9%、あまりないあるいは全くないと答えた者は男性で82%、女性で90%であった(図7)。高校生だった頃、

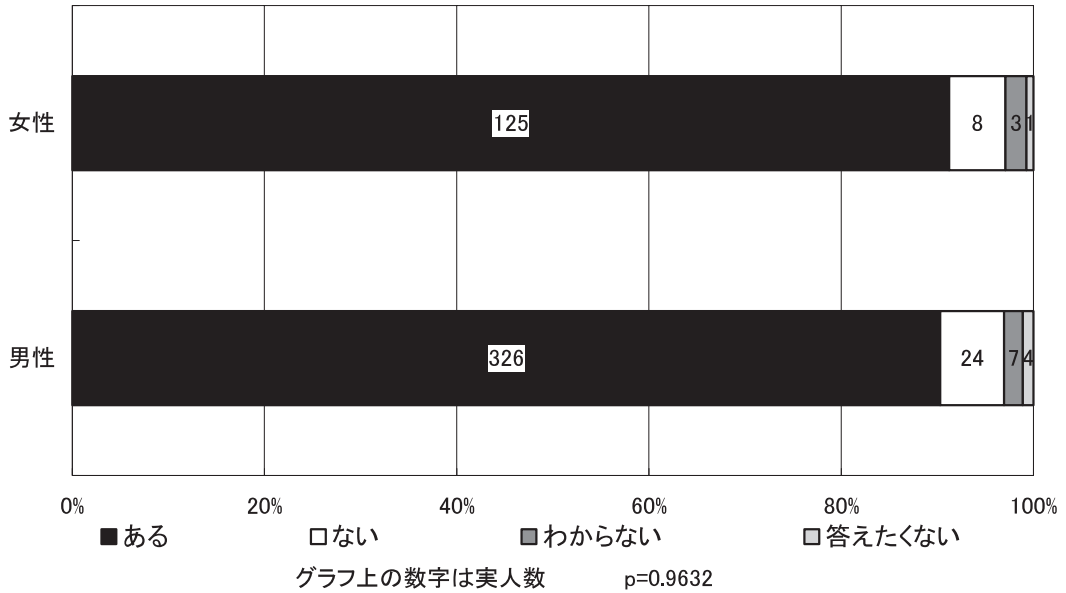


図2 高校で薬物について学んだことがあるか

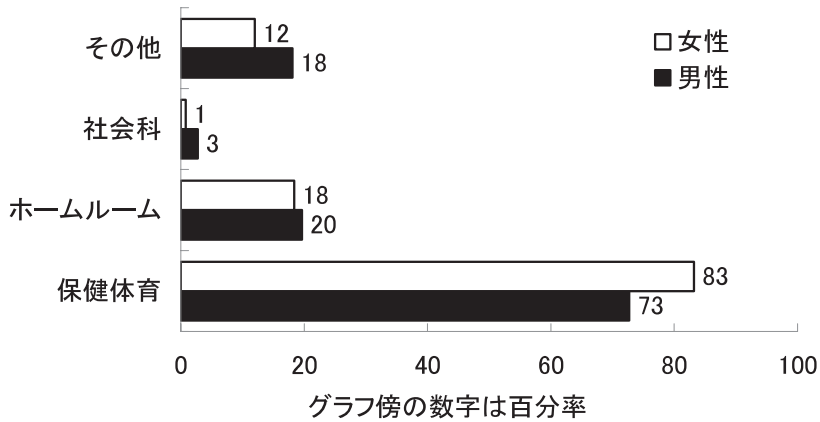
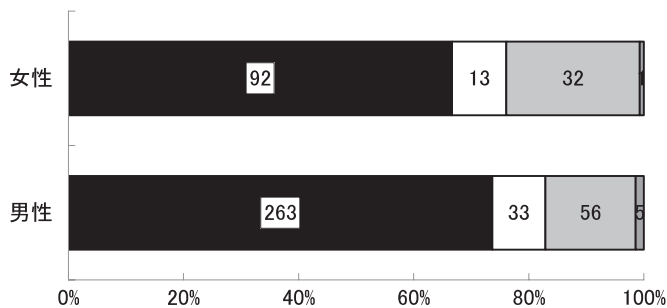
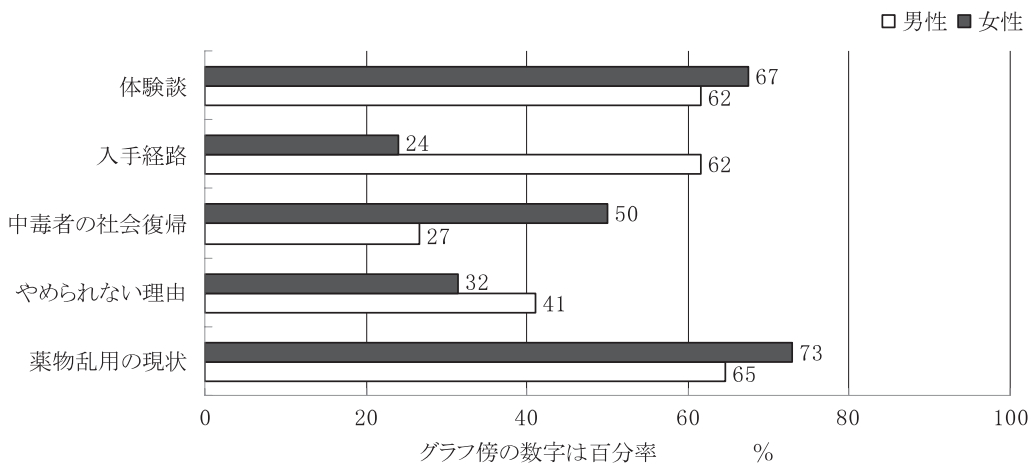


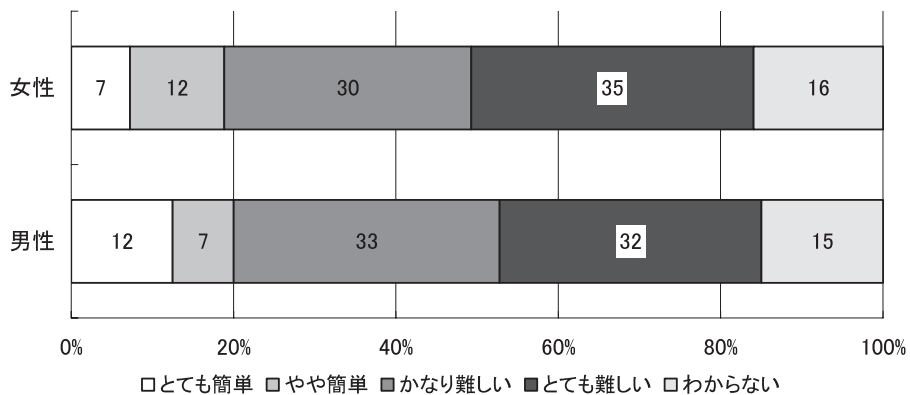
図3 何の授業で学習したか



■はい □いいえ □わからない □答えたくない
 グラフ内数字は実人数 p=0.2397
 図4 高校で薬物についてもっと教えるべきか



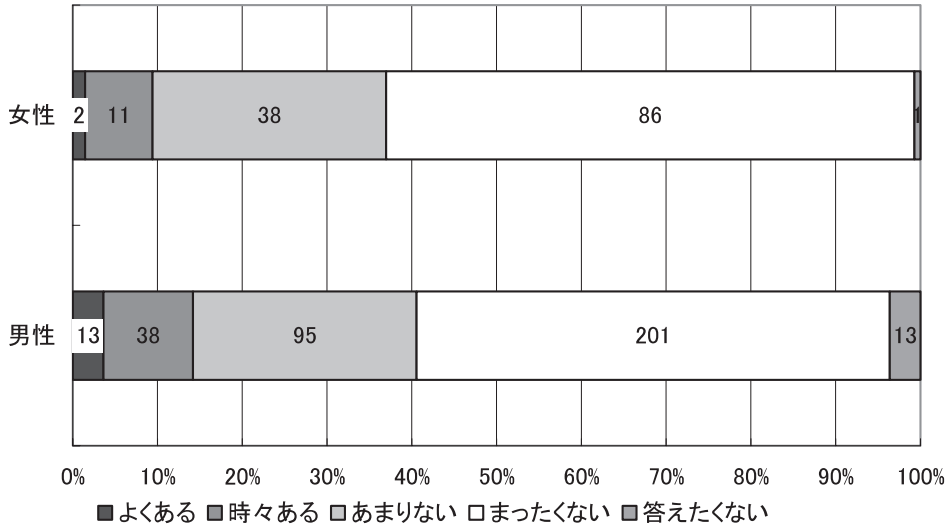
□男性 ■女性
 グラフ傍の数字は百分率 %
 図5 どのようなことを教えるべきか



□とても簡単 □やや簡単 ■かなり難しい ■とても難しい □わからない
 グラフ内の数字は実人数 p=0.3023
 図6 自分の意思がしっかりしていれば、止めることが簡単と思うか、難しいか

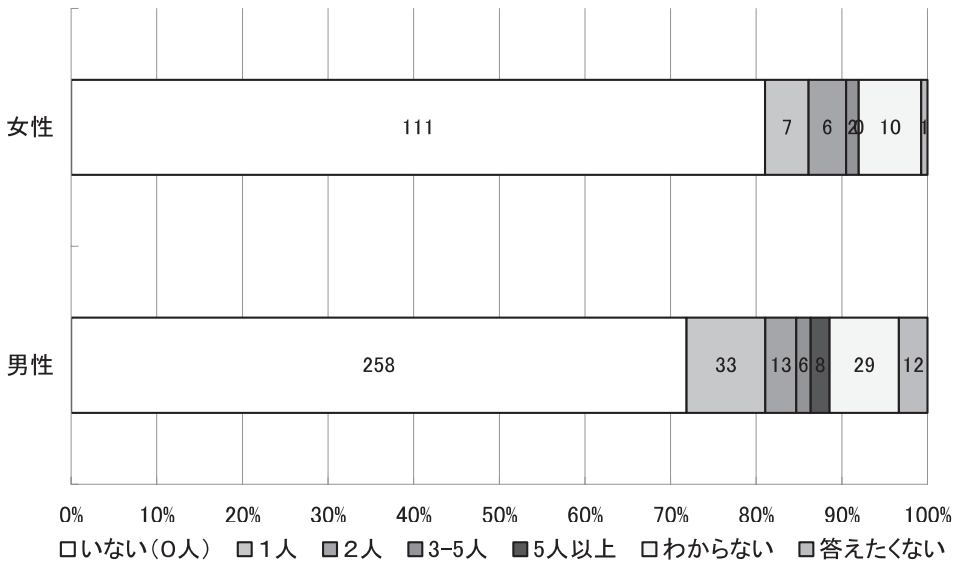
周りの高校生が薬物を使用した話を聞いたことがあるかの問いでは、全くなかった者は、男性71%、女性80%であり、一人以上いたと答えた者は、

男性15%、女性10%であった(図8)。更に男性で19%、女性で11%と、一人以上あったと答えた者が多かった(p=0.04)。「周りから薬物の使用



グラフ内数字は実人数 p=0.2022

図7 友人の間で、薬物の話題が出ることもあるか



グラフ内数字は実人数 p=0.1705

図8 高校生だったころ、周りの高校生が薬物を使用したという話を聞いたことがあるか

を誘われた経験があるか」について、あると答えた者は男性4%、女性1%であった(図9)。

多重ロジスティックモデルによる解析では、周りの高校生が薬物を使用したことを聞いたことがあることに有意の関連があったものは、年齢のみであった(表1)。

IV 考察

薬物事犯者数をみると、覚せい剤が最も多い。ヒロポンで代表される1950年代の第一次覚せい剤乱用期の後、一旦激減するが1970年代より第二次覚せい剤乱用期を迎えるが、覚せい剤取締法の重刑化もあり、年々検挙者数が漸減した。しかし、1995年以後再び増加し、第三次覚せい剤乱

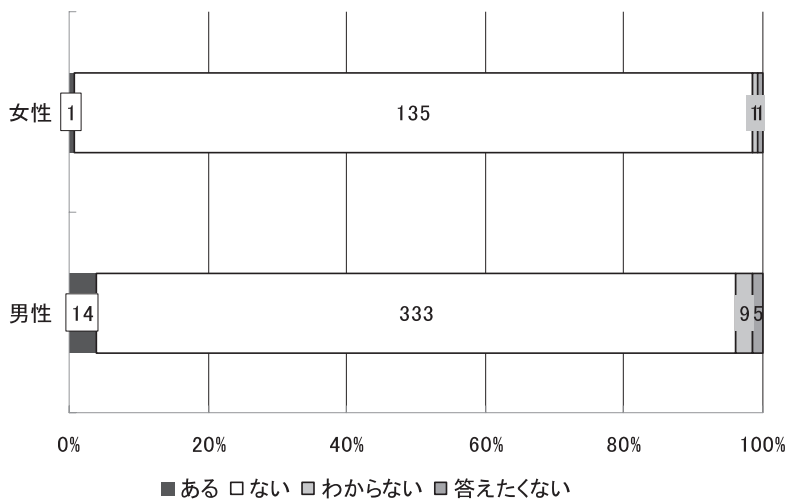


図9 周囲から薬物の使用を誘われたことがあるか

表1 「高校生だった頃、周りの高校生が薬物を使用したという話を聞いたことがある」に関する多重ロジスティックモデルの結果

項目	偏回帰係数	オッズ比	(95%の信頼区域)	有意確率
年齢	-0.386	0.680	(0.463-0.998)	0.049 *
性	-0.435	0.647	(0.385-1.087)	0.100
高校の所在地	-0.093	0.912	(0.670-1.240)	0.555
調査年	-0.135	0.874	(0.723-1.055)	0.161
調査月	0.005	1.005	(0.918-1.099)	0.921
何の授業で学んだか	0.000	1.00	(0.996-1.003)	0.859
高校でもっと教えるべき	-0.022	0.978	(0.848-1.128)	0.978

用期となる。第三次覚せい剤乱用期では、一般人にも広がり、特に青少年への浸淫が危惧されて、政府の薬物乱用防止新五カ年戦略（内閣府）では青少年による薬物乱用の根絶を第一目標としている。その報告では、2008年に、全国の高等学校で、薬物乱用の防止教室が64.1%、指導実施が93.0%でなされている。本研究では講習等を受けた者は高校で90%と高かった。全国規模での薬物乱用の取組が進んでいることを示すものであろう。

薬物乱用では、入手可能な薬物が用いられる。薬物依存症は大都市だけに集中しているものではない。本研究では、周りの人の薬物乱用が割合は20%を超え、また実際に勧誘をされた者が3%存在した。1999-2000年の大学生（854人）では薬物経験者が3%で、周囲に薬物使用者がいると答えた者は全学生の1/4であったという²⁾。中学生の調査で、勧誘率が3.3%、薬物の経験率が有機溶剤のみであるが男子1.3%、女子1.0%、全体で1.1%との報告があり³⁾、また2%と別の報告もある⁴⁾。2003年の関東の公立高校の調査では、大麻の経験率が5%との報道があった。

大麻は、他の薬物に対して作用が軽いとみなされ、乱用されやすい。大麻の急性薬理作用の特徴は、酩酊作用と空間認知機能障害である。酩酊作用には気分変容、知覚変容、思考変容等があり、芸能関係者の間で乱用されてきた。大麻の使用中止後、これらの症状は消失するが、中には大麻精神病を発生することもある⁶⁾。大麻の慢性使用による慢性精神障害の発生は結論が出ていない。しかし大麻は、無気力・集中力低下・判断力低下・無為などの症状を呈する無動機症候群を引き起こすことが強く疑われ、またフラッシュバック現象と思われる例も報告されている^{7,8)}。

大麻の使用後、さらに依存性の強い薬物が使用されることになりやすい。ニューヨーク州の中学生の調査から薬物連鎖モデルが提示され、大麻の使用者はLSD、覚せい剤、ヘロインの乱用に至ることが明らかになった⁹⁾。わが国では、有機溶剤が覚せい剤乱用への入り口（gateway drug）

であることが強調されている¹⁰⁾。近年急増の大麻は、他の作用の強い薬物へのgateway drugとして理解されるべきと考える。

男女差について、犯罪白書等では検挙者の男女の数は公開されていない。精神科医療施設での患者研究では、覚せい剤、有機溶剤では男性は女性の4倍と圧倒的に多いが、抗不安剤や鎮痛剤では男性は1.5倍と近接している⁵⁾。本研究の多重ロジスティックモデルの結果では、年齢のみが有意な因子であり、周りの人が薬物の使用が身近なことになりつつあることを意味すると考えられる。また、性差はなく、男女とも高校生の段階で既に薬物が身近なところにあることを意味すると思われる。薬物を直接勧誘されたことは、予防の面で看過できない。本研究では15例、3%が勧誘をうけていたが、標本数が小さいので、多変量解析による危険因子の抽出は差し控えた。

本調査の限界として、直接薬物を経験したことがあるかの調査はしなかったこと、調査個票を封筒に入れることはしなかったこと、自記式調査であること、確認のための面接調査を実施しなかったことが挙げられる。

薬物依存対策には、予防が最重要なのは言うまでもない。特に薬物を友人、知人から勧められたときにはっきりと断るスキルが必要と思われる。友人や先輩との人間関係を壊すことを恐れて、なかなか拒否できないと聞くことがある。中学生の喫煙対策でも、勧められて、はっきりと断る、あるいは上手に断るスキル、コツを覚えることが勧められている。乱用の予防教育では、知識の提供ばかりでなく、ロールプレイを用いた対応技術の習得も必要と考える。

薬物に関する相談システムについて、改めて考える必要がある。相談では当人の場合もあろうが、友人やパートナーなど、本人以外の場合もありうる。疑わしいとの相談の場合もあり、また差し迫った事実の場合もありうる。相談の内容も、医療や司法に関する専門的な対応も必要ある。一大学単独での対応には無理があり、医療機関や保健所、

精神保健福祉センター等の行政機関や所管の警察署等の外部機関と連携して、薬物の乱用と依存に対応する必要があると考える。

V 結語

4年間の医療系の学生に対して、薬物依存に関する調査を行った。周囲に薬物経験者が男性で15%、女性で11%存在し、実際に薬物を誘われた者が3%存在した。他の報告に対して、高値ではないが、持続して薬物乱用を監視しつつ、相談体制も整える必要があると思われる。

参考・引用文献

- 1) 栗栖瑛子：向精神薬の常備と乱用にかんする調査。厚生省精神・神経疾患研究委託費研究成果報告書 薬物依存の成因及び病態に関する研究昭和62年度 125-145, 1988.
- 2) 坂口早苗、坂口武洋：大学生における薬物使用の実態調査。体力・栄養・免疫学雑誌11：46-52, 2001.
- 3) 和田清、大槻直美：薬物乱用における全国中学生の意識実態調査。平成16年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）分担研究報告書 17-87, 2005.
- 4) 尾形由紀子、山下清香、松浦賢長：児童生徒と保護者の薬物認識状況と薬物乱用防止教育のあり方。福岡県立大学看護研究紀要 5：97-106, 2006.
- 5) 尾崎茂、和田清、大槻直美：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査。平成18年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）分担研究報告書。1-48, 2007.
- 6) 横山尚洋：大麻（カンナビス）精神病。精神医学 34:839-842, 1992.
- 7) 加藤信勝、佐藤能史、葉賀弘、浮田義一郎：マリファナ精神病の1臨床例。精神医学 17：216-269, 1975.
- 8) 徳井達司：V大麻乱用の臨床。依存性薬物情報シリーズNo.1 依存性薬物情報研究班67-93, 1987
- 9) Kandel,D.: Stages in Adolescent Involvement in Drug Use. Science 190, 912-914, 1975.
- 10) 和田清：中学生における薬物乱用—gateway drugの観点から—。小児科 47：1405-1411, 2006.